

松本清張全集 12

松本清張全集

12

文藝春秋

松本清張全集12

連環・彩霧

定価 1400円

1972年 3月20日第1刷 1978年 4月15日第4刷

著 者 © 松 本 清 張

発行者 樫 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話(代表)03-265・1211

印刷所 凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

連環

3

彩霧

297

解説
荒正人

465

装 幀 伊 藤 憲 治

連
環

第一章

1

笹井誠一が南栄堂という印刷所に勤めてから、一年近くなる。

南栄堂は、九州の北部でも大きな印刷所だった。

活版機械は二十台ぐらいある。ほかに半截のオフセットを二台持っていた。

笹井誠一が九州くんだりまで流れて来たのは、東京で失敗したからだ。大学を卒業して、ある会社に就職したが、それから三年後に、少しばかり金の使い込みをした。それがばれて職首になり、行くところがなくて、S市にいる学校友だちの池野を訪ねて来たのだった。

笹井は、母が苦勞した末に、ようやく、大学を出してもらったのだが、就職して二年目に、そのおふくろが死んだ。貧乏な最中にやっとおふくろの働きでもて来たのだから、笹井には一文の金もなかった。会社の金を使い込んだのも、いわばその不自由さからである。

池野がある銀行の支店詰めとなって、S市に来ていたのを、笹井が知って頼ったのだ。東京や大阪ではすぐに口がないと思って、思いきり九州まで飛んでみたのだった。

池野は笹井の始末に困って、出入りの印刷屋「南栄堂」

の主人下島豊太郎に頼み込んだのである。

南栄堂でも、ちょうど、帳簿のできる男が欲しいところだった。そこで、前に三年勤めた経験で笹井は南栄堂に雇われた。月給は一万二千円ぐらいだったが、いつまでも友だちの家に厄介になってもいられないので、彼は駄菓子屋の二階の四畳半の間を借りて、自炊することにした。東京と違って、地方だけに部屋代は安い。

笹井は南栄堂にはいつてみて、最初、びっくりした。

南栄堂というのは、主人の下島豊太郎が活版小僧から叩き上げて、一代でこれだけのし上がっただけに、普通の商店の組織とは少々変わっている。

活版機械が二十台、オフセットが二台という工場を、自分の住居といっしょにしていたのだった。つまり、階下が工場で、二階が家族のいる部屋。それと紙の倉庫とがあった。事務所といえは聞こえはいいが、実は、店の入口にまだ畳敷きで大福帳でも出しているような帳場があった。机は四つあり、そこには主人の机と、真向かいにはその妻が監督という立場ですわり、その隣りが、伝票など書いたり、電話を聞いたりしている岡村という女事務員のすわる机、その前が笹井自身に割り当てられた机だった。

笹井がおどろいたのは、そういう古い店の仕組みだけではなく、店主の下島豊太郎が大変な人物だということだった。彼は仕事以外に興味のない男で、朝から晩まで、家にいる限りは、工場と店の間を往復して、がみがみと職人や

外交員を怒鳴^{どな}っている。その怒鳴り方が、まるで土工頭か何かのような、頭ごなしの言い方だった。

下島豊太郎は、二十貫を越える大男だ。年は四十七歳だが、太った顔に血液が絶えず充滿して、真赧な色をしている。眉毛は薄い、眼が大きく、唇が厚かった。猪首だから、歩いている時は顎を突き出したようにして、肩を振り、よちよちと足を運ぶ。

工場のほうは忙しく、朝の八時から始まって夜の十二時ごろまで、ほとんどの機械が動いた。印刷所の仕事は、例外なく急ぎの注文ばかりだから、なかには徹夜の機械が必ず二、三台はある。

この機械の動きや、職工たちの働きぶりを、店主の下島豊太郎は、事務所の横から二階の居間に上がる広い階段の途中に、大猿のように止まって俯瞰するのである。根が小僧から上がっただけに、仕事については実にくわしい。損紙も、店主が階段の上から睨んでいる限りは、職工たちは戦々恐々として一枚も出さないようにした。

下島豊太郎が口やかましく叱るのは、職工たちだけでなくはなかった。店と呼んでいる帳場の者にも、絶えず小言がある。また、下島豊太郎はそこにすわっている限り、仕事以外の話題を持ち出したことはなかった。独りでこの店を切り回しているせい、か、絶えずいらしている。

だが、精力的だった。冬の凍る朝でも、五時には必ず起きて、真裸となり、裏の井戸から水を汲んで、五、六ばい

は頭からかぶるのだった。それから朝飯を食って、すぐに仕事にかかる。鞆の中には、豊太郎だけの心憶えの帳面があつて、誰も店の者が来ない間に、しきりとそれにそろばんを弾く。その計算がすんでから店の者が来ると、すぐ仕事のことがみ言のうのだった。

笹井誠一も、朝の八時から夜の十時までは働きづめだった。居残りをしたからといって特別手当が出るわけではない。これは笹井の着任以前からの慣例だということがわかった。

笹井は、経理が仕事といっても、それだけをやってすむわけではなかった。電話がかかって来れば、それも聞かし、工場との連絡や集金にもやらされる。のみならず、走り使いの小僧がいない時は、彼は自転車荷物台に印刷物をくくりつけて、ペダルを踏まなければならなかった。

よくしたもので、亭主の豊太郎が独りできりきり舞いしているのに、妻の滋子はそれほどでもなかった。豊太郎の指図で、滋子は店の監督ということになっていたが、彼女には数字はわからなかった。金の出し入れだけは滋子がするが、大事な帳面は豊太郎が持っていて、彼の出す伝票どおりに、金を金庫に入れたり、銀行へ預けたり、小切手を切ったりするだけだった。滋子は、豊太郎とは十六も年が違ふ。むろん、後妻で、豊太郎が元の印刷所の外交員をしていたころ女中をしていて、いっしょになったのだ。

「大変な所に世話をしてくれたな」

笹井は、友だちの池野にこぼした。池野も話を聞いてびっくりしていた。

「うちの銀行に、あのおやじが来るが、ふざけたことばかり言っただけだと笑っているがな。そんなにやかましい男か」

豊太郎は外交が巧^{うま}かった。池野が言うのとおり、得意先に行っただけで、お辞儀をして、大声で笑いながら冗談ばかりを言っている。現在の印刷所が大きくなったのも、豊太郎ひとりの働きなのだ。

「まあ、辛抱しろ。そのうち、いい所があったら替わるさ」

池野も慰めた。

しかし、替わったのは池野のほうだった。彼はまもなく大阪のほうの銀行へ転勤となつて、S市を去った。

笹井は、こんな店なんかに勤めていてもばかばかしいと思ひ、辞めようと思つたが、いざいざい。しかし、前の会社の使い込みのこともあり、いざいざい。腰掛けだと思つてゐるうち、ずるずると一年近くなつたのである。

ところが、こんな忙しいばかりで人使いだけが荒いところにおいても、一年近く経つと、彼は彼なりの妙味を発見した。

笹井は、最初、できるだけ豊太郎の氣に入るようにしていたが、そのうち、帳簿ができることで、豊太郎もいく

か笹井を信頼した。帳簿だけではなく、得意先からかかって来る電話の応対や、工場の職工どもをうまく煽^{おほ}つて仕事の刷り上がりを早くさせるコツも覚えて、しだいに豊太郎に氣に入られた。もつとも、これだけ努めて氣に入られなければ嘘だと思つてゐる。

笹井が途中で氣持が變つて、献身的に精出すようになったのは、彼なりに一つの目算があつたからである。

彼は、そのうちに機会をみて、集金に出た時、集まった金をごっそり持ち遁げしようと企んだのだった。一万二千円ぐらいでこんなに働かされているのだから、そのことが痛快な復讐^{ふしう}のように思えた。

2

笹井の真向かいにすわつてゐる岡村幸子^{おかむらゆきこ}は、二十五歳になる女だ。縮れ髪で、薄い雀斑^{そばかす}のある、唇の薄い女だった。この店に勤めて、すでに五年以上だった。彼女の仕事というのは、得意先の電話の応対と、外交員が受けて歸つた仕事を整理して帳面につけ、工場には操業伝票を回し、納入伝票を書き、職工の賃銀などを計算するのだった。そのほか、工場に行つて、受けた仕事の督促をしたり、客の苦情を伝えたりした。

いきおい、これは笹井の仕事と混同が起きた。五年もの経験もあつてか、彼女は要領よく職工どもに仕事をさせる。笹井は、はじめ、わからなかったが、そのうち、その秘密

を発見した。

職長は笠山かきやまという四十男だったが、これと岡村幸子とがどうも出来合っているらしい。笠山は職長だから、工場から帳場のほうによく顔を出す。そのとき幸子と交す兩人の口の利き方が、どうもおかしい。幸子は笠山を自在に操縦しているのだった。

幸子自身は、あとから来た笹井を小ばかにしていた。仕事と同じようなので、いきおい張合いみたになつて、そのつど、笹井のほうが負ける。男を男と思わぬ女で、ものの言い方も、ときには殴つてやりたいくらい乱暴だった。

笹井は、職長の笠山と岡村幸子との秘密を嗅ぎ当てたが、口には出さなかった。その代わり、笠山にはできるだけいいねにし、つとめてお世辞も言った。

笹井はともかく大学を出ている。笠山は小学校卒だけで、やはり小僧から職長になつた男だ。彼はほかの職工連中に、主人の豊太郎の真似で高圧的に出ているが、笹井がつとめて下手に出るようになってから笹井を信用するようになった。小学校出の彼は、やはり大学出の笹井にひけ目を感じていたらしい。それが自分を立ててくれるので、笠山も悪い気はしなかつたのである。

それから以後は、笹井の工場への督促が効果を見せるようになった。笹井の作戦は、ここでまず当たつた。

職長が軟化したので、それまで張り合うようにしていた岡村幸子も、笹井を邪魔にしなくなつた。

こういうことが、いちいち、主人の豊太郎にいい印象を与えた。一年足らずだったが、笹井は適当に狡く樂をすることも覚え、以前ほどの辛さは感じなくなつた。もつとも朝の八時から夜の十時ごろまで働かされることに変わりはない。

豊太郎には一人の男の子がいる。滋子との間にできた子で、一郎といつて、五つになる。

この子は親に似ないで、妙に蒼白い顔をして、病弱そうだった。頭が平均がとれぬくらい大きく、身体が痩せている。ちょっと奇形児みたいな感じだった。豊太郎は、この子がひどくかわいいらしい。

ところが、妻の滋子は、豊太郎ほどには一郎をかわいがらなかつた。どちらかというところ、豊太郎が惚れてもらった女房だから、豊太郎ほどの働き手には氣に入りそうにないくらい万事にうといのに、さして彼に叱られもせず、それですんでいた。仕事といえば、現金を金庫にしまつたり出したりすることと、豊太郎の命令で小切手を切ることだけだった。

彼女は色が白く、しもぶくれの、ちょっときれいに見える女だった。

滋子は一家の主婦だから、しじゅう、机の前にすわっているわけにはいかないのだが、それにしても、どんなに帳場の忙しいときでも傍観的だった。つまり、彼女には実務のことがよくわからないのである。ただ伝票をもらつて、

豊太郎に教えられたとおりに出納を預かるにすぎない。

この一家は、工場を見おろす階段を上がって、突き当たりの八畳の間一つと、六畳の間三つを、自分の家庭として使っていた。工場の上に建てられた総二階だから、二階もずいぶん広い。余った所が全部、紙の倉庫や製本場の一部になっていた。

職工の数が六十人、外交員四名、走り使いの小僧三名、それに職長の笠山、笹井と岡村幸子の三人を合わせて、総計七十人という大世帯だった。これだけを全部豊太郎が独りで運営する。水揚げにしても、ひと月八百万円は下らなかった。儲からない儲からないと言いながらも、これまでの蓄積も相当あって、豊太郎の資産は一億円に近いと言われていた。

しかし、笹井が睨んだところでは、純資産は、まず六、七千万円ぐらいのところであろう。なんといってもおもだったのが、機械や建物や土地である。南栄堂印刷所は、市でも目抜きに近い通りにあった。

一年近くなつて、笹井は豊太郎の信用を少しずつ身に付けてきた。なれない印刷所の工程も、彼にはば見当がついた。そうなると、商売の駆引きは、むしろ笹井の得意とするところだった。そんなところがしだいに豊太郎の気に入られ、

「笹井、あれはどうなった？」

と豊太郎のほうから訊いてくるくらいになった。

笹井誠一がこれほどまで努力したのは、豊太郎への献身を誓ったからではない。心の中で誓ったのは全然別のことだった。

笹井は、こんな田舎にいつまでも落ち着いている気持は毛頭なかった。彼は、なんとかして早く東京に帰りたいかった。だが、無一文では誰も相手にしないし、何ごともできない。笹井が辛抱したのは、そのうち、集金が最も多額に集まった時を狙って、このS市から持ち逃げすることだった。

だが、そのことに笹井はしだいに失望してきた。なるほど、集金が多い。しかし、得意先のほとんどを会社や工場に持っているこの印刷所では、たいていが銀行渡しの小切手だった。これでは何枚小切手が集まったところで役には立たない。むろん、笹井にとって有効なのは現金だけである。

現金だけに限ると、集まったといってもタカが知れていた。月末の集金で百万円も集まることは、まずない。それも外交員たちが手分けしての集計だから、笹井が集金する分は、その何分の一にも足りないのだ。わずか二十万円や三十万円持って走っても、なんの役にも立たなかった。新聞を見ると、わずかな金を持ち逃げして、すぐに足がついて捕まる者がいるが、これはばかなやり方といわねばならぬ。拐帯するからには、現金二百万ぐらいは欲しかった。しかし、この店ではどうして困難なのである。

笹井は、夜の十時ごろになってやっと解放され、駄菓子屋の二階に独りで寝転ぶ。ひと月一万二千円の給料では、遊ぶこともできなかった。彼は、天井の低い汚ない二階に、動物のようにごろごろするだけだった。

金が欲しかった。どうかして二百万円ぐらいの現金がつかめぬものか。二百万円でなくて百五十万円でもいい。いや、百万円でもいいのだ。それ以下となると用をなさない。

笹井誠一は、集金の拐帯を諦めようとしかけた。これに絶望したら、もう南栄堂みたいな所にいる理由は何もなかった。人使いが荒いだけの下島豊太郎のような男に使われていても、こちらがばかをみるだけの話だった。

何かいいことはないか。

笹井は、しじゅう敷きっ放してある万年床の中にはいつて思案するのだった。が、そのうち、彼は一つの妙計に思い当たった。

3

そのヒントは、職長の笠山と岡村幸子とが仲のいいことかと思いついた。

この二人の仲は、豊太郎が外交に出て留守の間、かなり笹井には目立つ。笠山が何かと用事にかこつけて帳場に来ることが多いからだ。格別な用件もなく、二人で冗談を言い合っているが、笹井にわからぬつもりでいるらしい。だが、こちらにはちゃんと感じて来る。店主の豊太郎の留守

は、なんといっても帳場のんびりさせた。

笹井は、大金の出納を受け持っている店主の妻滋子の誘惑を考えついたのである。

集金だけでは思うような嵩にもならない。そこで、滋子を手に入れて、もっと根本的なほうに取りかかることにした。

滋子は、いつも眠そうな眼をしてすわっている。鷹揚というか、気が利かないというか、どんな忙しい時でも落ち着いたものだった。だが、その顔は、うっとりとした眼つきといい、少し受口の唇といい、笹井がその気になって観察すると、そう捨てたものでもない。ちょっと見ると、それを感じさせないが、子細に眺めると、隠れた色気があるのだ。年も三十一で、いつも着物を着ているが、胸の線も張っている。

それからは、笹井はつとめて滋子の気に入るようにした。彼女の前ではきびきびと立ち働き、ときには、彼女の仕事を進んで手伝った。豊太郎の留守は彼女が主人と同じだから、そういうことをしてもおかしくはない。しかし笹井は、前にすわっている岡村幸子に怪しまれないように気をつけた。

岡村にしても、職長の笠山にしても、ほかの外交員にしても、滋子にはなんとなく安心していった。つまり、豊太郎があまりうるさいので、滋子のぼんやりしたところが彼らに寛ぎを与えるのだった。亭主のほうは口やかましいのに

女房があれたから、夫婦というものはよくできたものだ、とかげで言い合っていた。

笹井は、滋子を意識して以来、彼女への奉仕に努めた。

豊太郎のいる前では知らぬ顔をしているが、彼が外交に出て留守になると、しきりに、奥さん、奥さん、と言って、何かと彼女に手伝うようにする。

笹井の仕事は、経理だけではなく、いろいろな雑用も含まれている。それに、滋子の唯一の仕事である現金の出納は、笹井の経理と密接につながるから、彼女の担当を手伝っても少しもおかしくない。

滋子も笹井を重宝がるようになった。が、もちろん、笹井を特別に考えているわけではなかった。

笹井は、どのようにして滋子を誘惑するか、考え抜いた。彼女はほとんど外に出ない。あまり趣味のない女で、映画にも興味を持たなかった。もっとも、たまにそういう場所に行くときには豊太郎が付いて行く。

家の中では人目も多いし、仕事に追いまわされるから、これも望みがなかった。

彼女をどのような手段で落とすか。――笹井は駄菓子屋の二階に帰って、夜、寝転びながら考えるのだった。近ごろは、滋子もだいたい笹井を信用しはじめたから、まず、その準備のほうはできつつある。

この夫婦は、格別に仲が悪いというほどではない。豊太郎は外にひとりの妾を置いているのだが、これは笹井が来

るずっと以前からのつづきで、滋子にとっても公認だった。だから、そのせいで夫婦の仲にひびがはいっていることもなかった。

どうも、いいチャンスがない。

ところが、偶然のことから、笹井はそれを試みる格好の所を見つけた。それは、二階の紙の倉庫だった。

二階は、豊太郎の家族のために、奥が四室取ってあるが、残りは紙が積み込まれている。笹井は、この紙倉庫に、在庫調べや工場へ渡す用紙の出入れで帳簿を合わせによく行く。そこは幾つもの紙の山のために窓からはいる光線が遮られて、昼でも夕方のように薄暗いのだ。

笹井は、その場所に思い当たったとき、これだと心の中で叫んだ。

それを実行に移した日は、豊太郎が朝から外交に出て、いなかった。それも隣接の都市を回って来るというので、帰りが遅いはずだった。もしかすると、そのまま二号の所に行く可能性もあった。

笹井は、用紙の帳簿を持って二階に上がっていた。そして、十分ばかりすると、そこから降りて帳場を覗いた。滋子がそこにすわっていることは見届けて上がったのだが、彼女ははまだ、例のとおり、ぼんやりと机の前にすわっていた。

「奥さん」

笹井は、滋子のすぐ傍まで行って声をかけた。横で岡村

幸子が帳面をつけているので、それにはっきり聞こえるように言った。

「今、工場から、模造の八十斤を二連ほど出してくれ、と言っています、どうも、帳面と数が合わないんです。ちょっと来て、見ていただけませんか」

滋子は、全体の監督という立場になっている。店のことがわかってもらわなくても、一応はそういう名目になっているので、彼女も立ち上がった。

店に出ているときの滋子は、着物の上に事務服のような上張を着ている。それは特別に作らせたもので、淡いクリーム色のしゃれたものだった。一体に滋子は、格好を構うほうで、化粧も念入りにしている。

笹井は、先に立って二階に上がり、紙の山の間にはいった。そして、わざと倉庫の奥の方へ滋子を誘った。

滋子は、むろん、彼の意図に気が付かないで平気でついて来る。薄暗い所で見ると滋子の顔は、店にすわっているとよりほの白く浮かんで、ひどくきれいに見えた。それも笹井の野心をそそった。

笹井は、わざと紙の山の下のほうにかがんで、手に持った帳簿と見比べ、

「ここに、確か、八十斤が六連ほど残っているはずですがね。それが四連しかないんですよ。ちょっと、現物を見ていただけますか？」

「そう」

滋子がそれに眼をやった。

彼女は、紙が八十斤だろうが、百斤だろうが、いまだに区別がつかない。それでも、笹井にそう言われて、調べるようにしゃがみ込んだ。笹井は、そのために場所をよけて、彼女の後ろに立った。

「奥さん。かぞえてください」

笹井は催促した。

「どれ？」

滋子は訊く。

「その一番下に積んである、青いレッテルの端が見えるのが、それです。そら、四つしかないでしょう。ぼくは素人だからよくわかりませんが、確か、それが八十斤だと思います」

滋子はまだしゃがんで、笹井に言われたとおり、包み紙の端を破り、白い紙を指先で当たっている。しかし、重い包みがその上に幾つも重なっている、その圧力で思うように紙が取れない。

そんな、もそもそしている滋子の動作を、笹井は上からじっと見おろしていた。しゃがみ込んでいるときの、女の肩から背中、腰にかけての線は、いかにも無防備であった。あるいは、かえって、男を吸い寄せするような隙をつくっている。髪と後ろ袴の間には、白い項が伸びていた。

笹井は、自分も滋子の背中に蔽いかぶさるようにしてかがみ、

「奥さん、それですよ。もう少し引き出してみてくださ
い」

と彼女の耳元すれすれに言った。

さすがに、滋子もどきりとしたらしい。少し身体を動か
して避けようとした。

このとき、笹井は、急に滋子の背中に自分の全身をかけ
て仆れ、後ろから彼女の腕をつかんだ。

この紙倉庫には、よく階下から印刷職人が紙を取りに來
るので、笹井は、耳で警戒しながら滋子を背中から前の腕
を締めつけていた。遠くで足音がしたら、すぐでも跳ねの
くつもりになっていた。が、階下から印刷機械の音が単調に
聞こえるだけで、近くではこそとも物音がしない。

「奥さん」

笹井は、両腕で彼女の上膊部じょうはくぶを締めつけながら囁いた。

「ぼくは、奥さんが好きです」

滋子は、あまりもがかなかつた。そうされても、例のと
おり、うつとりとしているのか、それとも、動転している
のか、笹井にはよくわからない。彼は、その言葉をもう一
度、彼女の耳元に吐いた。彼女の動作を縛った手に力を入
れた。

彼女からの返事はなかつた。しかし、その呼吸が激しく
なったことはわかつた。

ここで彼女が大きな声を出したら、万事終わりである。
だが、こんな店を讖首ひびになつても、一向に惜しくはなかつ

た。その時はその時だ。

だが、彼女は声を出し得なかつた。むこうむきになつて
いるので、顔はよくわからない。彼女の豊かな髪だけが、
笹井の顔を撫でた。

笹井は、こんなことだけでは決定的にはならないと思い、
今度は彼女の左肩を押えた手に力を入れて、それをこじ起
こした。

すると、滋子の身体がねじれて、上半身が笹井のほうに
も見えるようになった。彼女の横顔がはじめてわかつたの
だ。彼女のその眠たげな眼は、今はびくりしたように見
開き、口もあけて、忙いそしない息を吐いていた。

笹井は、少しばかり暴れている彼女を、もう一度ねじ起
こした。すると、彼女の膝が崩れて横倒しになった。笹井
はその上にのしかかつてその首筋をおさえ、彼女の唇を思
い切り吸った。

女の顔は火照ほてって熱くなっていた。

「ぼくは、前から奥さんが好きでしたよ」

笹井は、彼女の唇をつき放した後で言った。

——滋子は、自分で起き上がり、真藏な顔をして、黙っ
てそこを出て行った。

4

笹井は、帳場に戻った。事務員の岡村幸子は、どこやら
に電話をかけていた。それがすんだあと、笹井に、

「どう、紙のほうはわかったの？」

と訊いた。

岡村は何も気づいてはいなかった。滋子はやはり降りて来なかった。

もつとも、彼女は、しじゅう帳場にいるわけではないから、降りて来なくても、岡村幸子が妙に思うことはない。ただ、笹井は仕事をしながら、滋子のことには気が取られていた。滋子は、今のことを夫の豊太郎に話さうか。そして、今はどうしているのか。

突然のことで、滋子もびっくりしていたようだった。しかし、それほど抵抗もしなかったし、大きな声も上げなかった。彼女の唇を吸ったとき、さすがに強くそれを結んでいたが、それが抵抗といえれば抵抗であった。その後、彼女は黙って笹井の立っている前を通り、紙倉庫から出て行った。

笹井は、帳簿にペンを走らせながら、自分が滋子の背中を襲ってからの彼女の反応を、子細に検討していた。確かに、彼女の感情は、ふだんのぼんやりしたときとはまるで変わって、電気を通じたように昂ぶっていた。

当たり前のことだが、その急な変化が、果たして笹井の側に有利なのかどうか、まだ決定的な判断はつかなかった。彼は、電話の対応にも、岡村幸子から話しかけられても、すべてが上の空だった。

それから三時間ばかりして、滋子がゆっくりと帳場に現

われた。

笹井が彼女の様子をちらちら窺うと、彼女は笹井には顔を背けている。そして、珍しく帳簿を開いて見ているのだ。顔も、笹井が紙倉庫に呼ぶ前よりも少し濃い目な化粧に直っていた。笹井は、滋子のその様子を見た瞬間、はつきりと彼女をつかんだと思った。

その夜、笹井は、間借りの狭い自分の部屋で天井を見つめながら、久しぶりに愉しくなった。

あの様子では、滋子はこちらに有望だ。彼女と豊太郎との夫婦関係がどのようなものかわからないが、彼女は今ごろ、別な男から言い寄られるとは思ってもみなかったに違いない。日ごろはぼんやりした、気の利かなそうな女だ。豊太郎の働きにまったくよりかかって、ほとんどなすこともなくその目を送っている平凡な女だった。

彼女にしても、これまで、笹井をそんな気持ちで見たことは一度もあるまい。ただの使用人と思っていたはずだ。その雇い人が、あの薄暗い紙倉庫で、不意に男と変わったのだ。この急襲は、しかし、彼女から確かに手応えをもらった。笹井は、数日をも待たず、明日にでも滋子の身体に火をつけてやろうと思った。

翌日になった。笹井は、朝早く出勤する。しかし、今日の出勤には、ここに勤めてからはじめての心の弾みがあった。

何も知らないらしい豊太郎は、午前中、帳場にすわって